

「実のならないいちじくの木のとえ」

2015年09月14日

ルカによる福音書 13章6節～9節。そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

子どもの頃、わが家の庭に大きないちじくの木があった。梅雨が明け、夏になると沢山の実をつけた。熟れた実は甘く、美味しい。世話をしなくても、逞しく伸びる木である。イスラエルではいちじくは豊かさを象徴する果実で、聖書に頻繁に出てくる。

主イエスはいちじくに関する譬えを語られた。ぶどう園の主人がぶどう園にいちじくの木を植えた。実がなっているかと探しに来たが、なっていなかった。主人は園丁に「もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか」と命じた。いちじくの木は植えて、2～3年で実をつけるようになる。主人は三年経っても、実をつけないいちじくに怒り、切り倒すように命じた訳である。園丁は「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください」と答えた。

このいちじくの木に関する主人と園丁の会話は、何を言っているのであろうか。ルカ福音書は「悔い改め」を強調している。それにもかかわらず、悔い改めない人間の心の頑なさを再三記し、激しい裁きを語っている。その中で、悔い改めの実を結ぶように、木の周りを掘り、肥やしをやって、伐採の裁きの遅延を「執り成す」主イエスの配慮と忍耐を語っているのではないか。

福音の核心は「裁き」ではなく、主イエスの執り成しによる「赦し」である。少年院での感動的な出来事を聞いたことがある。一人の少年が罪を犯し、少年院に送られた。教官たちは厳しい生活指導をし、日々、悔い改めを迫った。しかし、彼は反抗的な態度を崩さなかった。ある日、母親が訪ねて来て、一言も咎めず「お前の好きなおはぎを持って来た。これから寒くなるからセーターを着なさい」とテーブルの上に二つの包みを置いた。すると、少年は突然「お母さん、僕が悪かった」と言い、おいおい泣き出した。母親の「赦し」を知ったのである。その日から、見違えるように立ち直っていったという。

人は「裁き」に対しては自分を正当化し、反抗的になる。「赦し」によって、自分の過ちに気づき、悔い改めて立ち直っていく。主イエスの十字架と復活は赦しの中に裁きはあるという福音である。赦された時、こんな私でも「よし」としてくださるのですかと喜びと感謝に満たされる。主イエスはペトロの離反を知りつつも「シモン（ペトロ）、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけて神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい」と語りかけている。私たちは主イエスの「執り成し」の祈りの中に置かれている。だから、立ち直ることが可能なのである。